

白鳥



第 67 号

2011 年 4 月 日本野鳥の会三重

http://www.geocities.jp/sirochidori_mie/

今回の災害と原子力発電所の事故について

2011年3月29日

平井正志

「しろちどり」への文をこんなに重い気持ちで書くことは初めてである。第二次世界大戦後最大の自然災害で、多くの方が亡くなられ、また被災された。亡くなられた方々の冥福を祈り、被災された方々に励ましの言葉を贈りたい。さらに、原子力発電所で思っても見なかった重大な事態が起こっている。この号が会員の手許に届く時どのような事態になっているか私にも想像できない。最悪の事態になる可能性は極めて高い。いずれにせよ、日本の環境問題を根底から揺るがせてしまった。これまでに外部へ飛散した放射性物質、今後飛散するであろうさらに多くの放射性物質と向き合いながら我々は生活せねばなるまい。世界の人口密集地ではどこも経験しなかった事態である。放射能の影響は人間だけでなく、野生の動植物へも影響を及ぼし、その影響が必然的に人間に影響する。野外で活動することが健康に良いとは言いつれない事態になるかもしれない。野生動物の保護など二の次であるといわれる社会になるかもしれない。しかし、野生の動植物への影響を軽視、無視してよいとは断じて言えない。我々の探鳥会は今後、楽しみのためだけでなく、悲しいかな、この影響を監視する場となるであろう。また、これは我々でなければできない仕事である。

この事故の結果、関東は深刻な電力不足に陥って

いる。夏を乗り切られる補償は全くない。いずれにせよ、日本がこれから消費する電力、消費するエネルギーを出来る限り少なくする社会に移行しなければならないであろう。思えば大都会では深夜まで、煌々と電灯がともし、夏にビルではクーラーががんがんと効く。新幹線はひっきりなしに走り、多くの人がひんぱんに移動する。高速道路を大型トラックが走り回る。インターネットで注文すれば、翌日品物が届く。私が小さかったころには想像もできなかった社会である。この半世紀、日本は物質的には際だって豊になったが、人々がそれに伴って幸せになったかというところではない。ひとたび、このような仕組みになった社会を元にもどすのは至難の業であろうが、社会、経済の構造そのものを考えなおし、消費エネルギーを少なくとも幸福に暮らせる社会をめざすべきであろう。また、それは可能であろう。そのためには経済の構造、産業の構造の変化が不可欠であろう。また、我々も日々の生活で努力しなければならないだろう。

-----考えも心もまとまらないまま-----

目次

今回の災害と原子力発電所の事故について	1
目次	2
表紙の言葉	2
中勢五主海岸のページ	2
しろちどり原稿募集	7
ミヤコドリ	7
私の「鷹狩り」遭遇記	8
道東にタンチョウの今昔をたずねる旅	9
野鳥記録	10
事務局だより	11
理事会報告	11
藤原岳鉦山新鉦区計画見直し要請	11
探鳥会報告	12
編集後記	15

表紙の言葉

北川和則（多気町）

憧れの鳥 イヌワシ

四、五回伊吹へ観に行ったが、
やはりイヌワシはスゴイ。

悠々と飛ぶ姿は、
まさに鳥の王者そのもの。

風を自由にあやつり、
矢のようにグライダーのように飛ぶ。
そこにほれる。 イヌワシよ永遠に。

中勢五主海岸のページ

日本野鳥の会三重が現在力を入れて保護しようとしている中勢五主海岸についてまとめたページを作りました。今号では最初の部分を掲載します。「しろちどり」紙上に連載してゆきたいと考えています。ご期待ください。

はじめに

三重県の伊勢湾に面した海岸はかつて遠浅の砂浜海岸でした。木曾三川が流入する桑名から熱田にかけては江戸時代の東海道でも唯一陸路がなく、七里の渡し、すなわち舟による連絡しかありませんでした。それほど低湿地が連続していました。この伊勢湾最奥の付近は江戸時代からさかんに干拓され、徐々に農地になり、明治に入ってから名古屋港が開かれ、戦後から高度成長期には四日市周辺、さらに三河側知多半島側などが港や工場用地として埋め立てられてきました。今では海岸のほとんどがコンクリート護岸とテトラポット、それともかろうじて砂浜があるものの海浜植生すら生育できないごく奥行きが狭い海岸になってしまいました。

しかし、それよりも南側、三重県中部の津市から松阪市にかけての海岸にはまだ、自然の砂浜海岸が残され、干潟もいくつかあります。この海岸には海浜植生も生育し、多くの野鳥が利用しています。また、アカウミガメも稀に産卵に上陸します。この海域は昔から地引網など沿岸での漁業が盛んでした。今でも、アサリやシラス、カタクチイワシ、コウナゴ（イカナゴ）などの漁業も盛んです。町屋海岸や香良洲町ではカタクチイワシを天日に干して煮干しにしている風景が見られます。

私たち、日本野鳥の会三重は津市中ノ川から松阪市中ノ川までを中勢五主海岸（仮称）として自然環境を保護すべきであると考えています。むろん、現在行われている漁業と海岸の保護は両立させるべきと考えていますし、レジャーについても野鳥、海浜植生、ウミガメなどの生物の生息、繁殖に大きな影響が無い限り許容されるべきと私たちは考えます。ここにその概略を紹介します。

1. 津市中の川から志登茂川河口まで、

河芸漁港、白塚漁港がありますが、それ以外は奥行きのある砂浜海岸が続きます。北から豊津浦、白塚海岸、町屋浦と呼ばれています。大正時代までは地引き網による漁業が盛んでした。今でも沖ではシラスやコウナゴが漁獲され、海岸の工場で茹でられ、海岸で天日に乾され煮干しやチリメンに加工されています。またアサリの採集も盛んです。

また田中川河口右岸には小さな河口干潟があります。かつては両岸にあったのですが、左岸のも

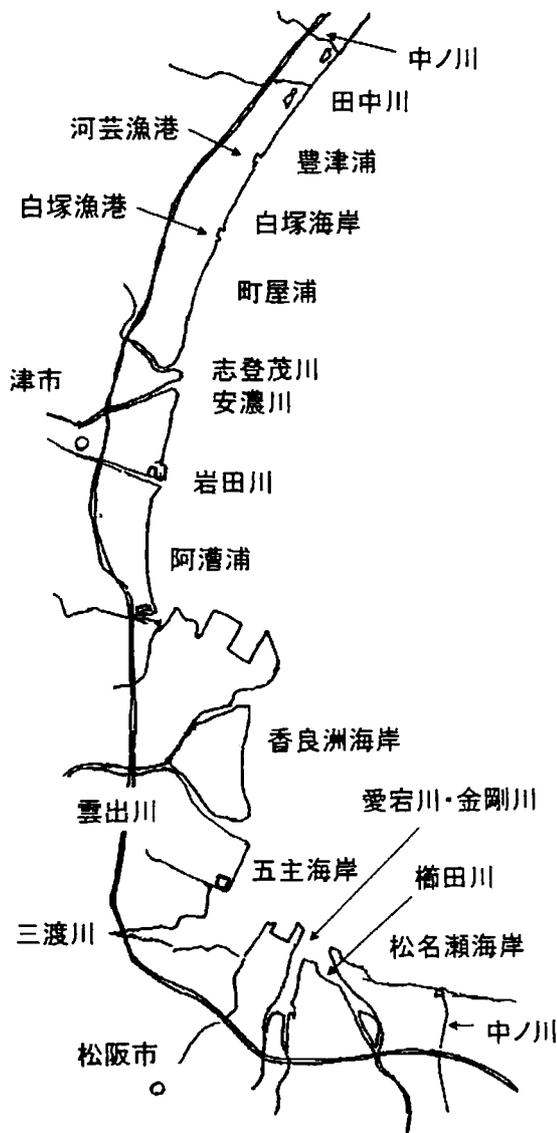


図1. 中勢海岸の全容

のはヨットハーバーの建設で消滅してしまいました。かつてはウナギの養殖が盛んで、田中川河口付近には養殖池が残されていましたが、埋め立てられ始め、カワウのコロニーも無くなってしまいました。また、これらの池は冬にカモ類が多く訪れ越冬します。白塚海岸では「白塚の浜を愛する会」が植生の保護やシロチドリ繁殖保護の活動をしています。また、アカウミガメの産卵については三重大学のサークル「かめっぷり」が夏にパトロールし、保護しています。毎年 1、2 頭が上陸し、産卵するようです。

この海岸を訪れる野鳥たち

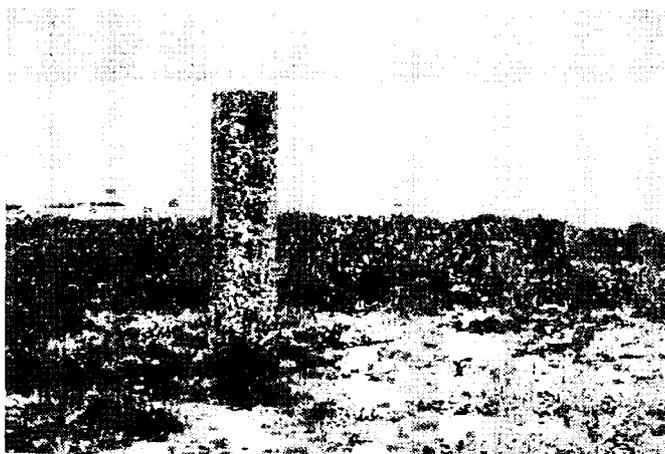
この砂浜海岸では多くの鳥が見られます。カモメ類では春と秋の渡りの時期にセグロカモメ、ユリカモメの大群が見られ、海岸をまっしろにします。それに混じり、カモメ、ウミネコも見られます。オオセグロカモメはごく少数です。ズグロカモメは田中川河口干潟で稀に 1 羽程度見られます。

シギ・チドリ類では何と言ってもミユビシギが注目に値します。別のページで詳しく紹介します。ハマシギも春と秋、それに越冬する個体もあります。数は年により大きく変化します。時にはミユビシギと混群で行動する場合があります。初心者がこの 2 種の冬羽を見分けるよい機会です。

それ以外のシギ・チドリは数が多くありませんが、時折、安濃川河口からミヤコドリがやって来て、波打ち際で貝を捜しています。また、チュウシャクシギ、キアシシギなども稀にですが、見られます。絶滅危惧種ヘラシギが夏の終わりに出現することもあります。

シロチドリの繁殖

シロチドリは三重県の県の鳥に指定されています。春に砂浜海岸に直接卵を産み、およそ 3 週間雄雌が交代で抱卵します。孵化したヒナはすぐに歩けるようになり親鳥について 3 週間砂浜で過ごし、生長し、飛べるようになります。産卵は通常 4 月中下旬で、抱卵期があいにくゴールデンウィークにかかります。多くの親鳥が抱卵を放棄するようです。5 月下旬には親鳥について餌をとるヒナが見られます。シロチドリはかつて多くが繁殖していたようです。地元の漁師の話では昔子供らがヒナを捕まえてきて遊んだとのことで、それほど多くのヒナが孵化していたのでしょうか。また、1990 年代の我々の調査でも、20 羽前後の孵化が観察されていました。しかし、その後繁殖個体も減り、この海岸で観察されるヒナの数も 10 羽に届きません。2010 年の繁殖期にはヒナを一羽も発見することができませんでした。減った原因は不明ですが、海岸をレジャーや犬の散歩に利用する人が増えたのも原因でしょう。海岸に進入した自動車につぶされた卵が見られることもあります。特に豊津浦の中別保樋門のあたりは自動車が進入でき、ジェットスキーを楽しむために、休日には多くの車が入り込み、長時間駐車し、シロチドリの繁殖を妨害しています。シロチドリはこの中勢海岸のほぼ全域で繁殖が見られますが、その数はあまり多くありません。



白塚海岸にある漁場標識

ミュビシギの飛来

ミュビシギは広く新旧大陸に分布し、全世界で600,000羽ほど生息すると推定されており、カナダ北部、グリーンランド、シベリア北極海沿岸で繁殖し、冬にはアフリカ、南アメリカ、オーストラリアなどに渡ります。他のシギ類と異なり、干潟には入らず、砂浜海岸に飛来し、波打ち際をちょこまかと走り回り、甲殻類などの餌を摂ります。日本に渡ってくるルート（東アジアルート）の個体はシベリア北部タイミル半島付近で繁殖し、越冬期にはオーストラリア南部まで移動します。その個体数はわずかに22,000羽と推定されています。日本全体では毎年2000羽から3000羽が観察されています。最も数が多いのは千葉県

里浜です。それ以外に石川県高松海岸、などが飛来地として知られています。この豊津浦・町屋浦では毎年220羽以上が観察され、すなわち、生息数の1%以上が飛来し、東アジアルート

のミュビシギ個体群を維持するために重要地域と見なされます。最近では最高時に400羽を超える時もあります。そのため、豊津浦・町屋浦は環境省によりラムサール条約登録湿地の候補地と指定されました。さらにこの2、3年越冬する個体が見られるようになりました。2009年から2010年の冬にも50羽から100羽が越冬したと推定されます。2011年2月には304羽を記録しました。このミュビシギの飛来できる静かな砂浜海岸を維持することが必要です。



ミュビシギの群飛 (撮影：石原 宏)



波打ち際で餌を採るミュビシギ (撮影：石原 宏)

海岸植生

白塚海岸などにはコウボウムギ、ハマボウフウ、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、ハマダイコンなどの海浜植生が広がっています。また白塚海岸ではカワラナデシコが夏に可憐な花を付けます。田中川河口の干潟ではハマサジ・ホソバハマアカザ・ハママツナ等の塩性植生がわずかですが見られます。伊勢湾中部で塩性植生が見られるのはもうごくわずかな場所だけです。残念ながら、外来植物のユッカもこの海岸のあちこちに進入して、白い花を咲かせています。また、一部では園芸植物を海岸に植えているのが見られます。海岸は花壇や公園ではありません。また、公園にする必要もありません。海岸は自然のままに残したいと思うのですが。

2. 志登茂川、安濃川河口

この2つの川は津市内で近接して伊勢湾に流れ出しています。かつては河口付近にウナギの養魚池がありましたが、今は埋め立てられ、住宅地になっています。河口には潮の流れによる砂洲があり、かつ河口沖合にも砂洲と干潟があり、多くの野鳥の採餌し、休憩する場所になっています。この河口を訪れるシギ・チドリは数多く、キアシシギは志登茂川で多く見られ、100羽前後が見られます。ハマシギの大群が見られることもあります。その他にシロチドリ、キョウジョシギ、オオソリ

ハシシギ、チュウシャクシギ、ソリハシシギなども見られます。また、ミヤコドリの飛来数は近年増えてきました。まれに、コクガンが飛来します。冬には河口にマガモ、カルガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモなどのカモ類が多く滞在します。冬には沖合にスズガモ、ウミアイサ、ホオジロガモが毎冬飛来し、羽を休めます。スズガモは数千羽に登ることもあります。これらのカモは主に沖合ですごしますが、ウミアイサやホオジロガモでは河口付近へ入る個体が時々みうけられます。また、ユリカモメ、セグロカモメなどカモメ類やカワウも河口の砂洲で休息します。この河口干潟は津市の中心部に近く、春の大潮干潮時には潮干狩りで多くの人が訪れます。以前は安濃川左岸（北岸）のの堤防へ車を入れることも可能でしたが、ゴミの不法投棄が多かったため、最近では柵が設けられ、乗り入れはできません。右岸（南岸）の先端部に駐車場があり、そこから堤防へ登って鳥を観察するのが最もよいでしょう。

ミヤコドリ

ミヤコドリは一風変わった白と黒のシギ・チドリの仲間です。ユーラシア大陸に広く分布します。日本に渡ってくる鳥はカムチャツカ方面で繁殖すると考えられます。この鳥は縦に扁平なくちばしを持っており、これを上手に使って二枚貝を食べます。



安濃川河口のミヤコドリ (撮影：岡 八智子)

英名では Oyster catcher、“牡蠣を採るもの”と呼ばれています。この付近に多いバカガイやアサリが食べられているのでしょう。以前はとてもめずらしい鳥でした。しかし、近年増加し、ここ数年日本全体では毎年250羽から300羽が観察されています。東京湾の三番瀬が特に有名で200羽を越えることがあります。この安濃川河口では最近増加しており、我々の調査によると2010年1月には津市から松阪市の海岸全体で74羽が、2011年には104羽が記録されました。安濃川河口はミヤコドリをじっくり観察できる数少ない場所です。関西方面からもミヤコドリを見るために多くのバーダーが訪れます。

コクガン

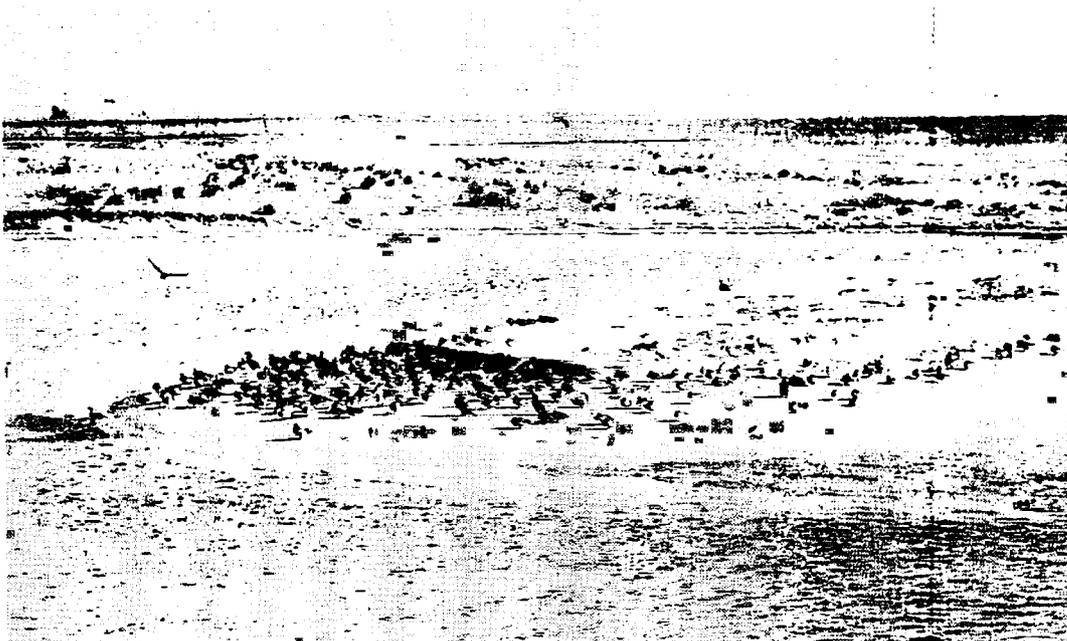
コクガンはガンの仲間では体が小さく全身が黒い鳥です。上尾筒、下尾筒と脇が白く、首にも白い模様があります。シベリア北極海沿岸のツンドラで繁殖し、冬に少数が日本に渡ってきて越冬します。他のガン類とはやや違って海辺で生活しアマモなどの海草をたべます。国の天然記念物に指定されています。以前安濃川河口で猟銃で撃ち落とされ大きな話題になりました。その後は事故を

聞いていません。安濃川河口では毎年のように数羽が越冬します。2010年から2011年の冬には数羽が越冬しました。

3. 安濃川から雲出古川河口まで、

津市の中心部の海岸で、安濃川河口から岩田川河口までは砂浜の奥行きがごく狭く、人潮満潮時にはほとんどが水没し、野鳥が利用できるようなスペースがありません。岩田川河口に干潟はありません。岩田川以南の阿漕浦（あこぎうら）には奥行きのある砂浜と松林が残されており、一部は海水浴場として利用されています。また、住宅地に近く、散歩の人が多く訪れます。野鳥に関する調査はほとんどされていません。ミユビシギやハマシギなどが飛来するようですが、あまり多くはないでしょう。少数のシロチドリが繁殖する可能性はあります。

相川（あいかわ）周辺から以南は大規模に埋め立てられ、日本鋼管の工場用地になり、さらに下水処理場や競艇場が建設されており、野鳥が利用できるスペースはないようです。また、一般の観察者が立ち入りできる場所はごくわずかで、野鳥の調査は行われていません。



安濃川河口の砂洲

しろちどり原稿募集

編集部では原稿を募集しています。鳥に関わるどのようなことでも結構です。

挿絵なども募集します。

締め切りは2011年7月15日です。

原稿は、編集担当 近藤義孝まで E-mail: fwhy4368@mb.infoweb.ne.jp

住所 〒511-0123 桑名市多度町北猪飼 521

2011 ミヤコドリ

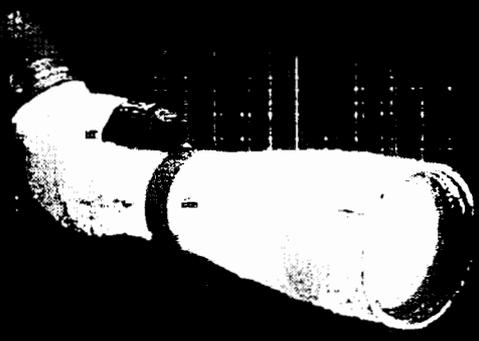
岡 八智子

今では津の海の冬の風物詩となった“ミヤコドリ”今年もやってきました。昨年74羽をカウントし昨年暮れから100羽突破では?と思われていました。今年あっさりとお台に乗りました。

2011年1月29日満潮時、会員14名が河芸マリーナから雲出川河口まで(鈴鹿川河口・派川も)の各地点を担当し同時カウントをしました。結局、ミヤコドリは分散していなく、安濃川河口の洲の先に全員集合でした。しかし、重なって見えるし少し動いて前後するので望遠鏡でのカウントは難しく写真判定することにし

ました。その時の望遠鏡でのカウントは102羽でしたが1月22日に久住さんが撮影されたのが104羽でしたのでこちらの方が今期の最高数となりました。1995年に雲出川河口で久住さんが2羽を最初に発見されたので感慨も深いと思います。

この調子で増えると来年のカウントは大変ではと今から嬉しい心配をしています。この津の海がいかにか豊かであるかと改めて思いました。他にもコクガンが13羽(安濃川河口4羽・雲出川河口9羽)・ツクシガモ1羽~3羽・ズグロカモメが30羽弱でこれもしっかりカウントが必要だと思われます。またシギ類の越冬ではダイシャクシギ4羽・セイタカシギ最初は13羽、後に6羽でした。(今井光昌氏情報参考)

	取扱商品
	フィールドスコープ 双眼鏡(小型・大型) 天体望遠鏡 カメラ(新品・中古) その他光学製品各種
	取扱メーカー
	KOWA・NIKON・FUJINON MIYAUCHI・VIXEN・PENTAX他
中部地区最大の光学製品専門店	
TELESCOPE CENTER EYEBELL	
テレスコープセンターアイベル (株式会社アイベル)	
〒514-0801 津市船頭町3412(メガネのマスダ2F) TEL 059-228-4119	
定休日/毎週水曜日 営業時間/10:00~19:00	
ホームページ http://www.eyebell.com メールアドレス eyebell@diamond.broba.cc	

私の「鷹狩り」遭遇記

川口 久美

ときどき、「読書」に飽きると、気分転換と運動不足解消を兼ねマウンテン・バイクに乗って10数キロ離れたところまで「郊外の散歩」に出かけます。

「自転車に乗って散歩」というのも変ですが、私の自転車乗りは、上り坂や向かい風のときなどは、降りて、あたりの景色を眺めながら歩くのです。あくまで『むりしない・がんばらない・すぐ諦める』が私流なのです。

実はこのマウンテン・バイク、古い「曰く付き」の一台なのだが、その話はまたあとでしょう。(←この展開は、BSHテレ・「小さな村の物語」ナレーションのパクリです)

川今日はこれから、先日(2月17日)、散歩の途中で遭遇したちょっと珍しい私の体験を報告することにします。いくつかの集落を過ぎ、休耕田地帯を流れる小川に沿った道を、自転車に手を添えて歩いていました。時あたかも早春、♪春は名のみ風の寒さや〜♪・・・と、口ずさみながら見ると、遠くの空に鳥影が映りました。さっそくポケットから愛用の「スワロ」を引っ張り出して覗くと、小型のタカが、二・三十メートルの高度で、羽ばたきと滑翔を繰り返し、ときにはホバリングも交えながらあちこち移動しているのを見つけました。

どうやら狩りをしている様子です。と、急に翼をすぼめて降下し、すばらしいスピードで民家の庭に突っ込み、一瞬木立の中に消えたと思ったら反対側から出、すぐに取り返り庭の中に入ったきり出てこなくなりました。私は、「オッ! やったな」と、急いでその民家に近づくと、そこは、暫く人が住んでいない、荒れた大きな「空き家」でした。

入っていくと、鳥が消えたあたりは旧家らしい農家の日本庭園跡でした。下を探して歩いていると、「バササッ!」と目の前から飛び立ったタカ、ハイタカ♀でした。(この鳥は飛んだあと近くの電線に止まり、そのあと私が目を放している間にいなくなっていた) ハイタカが飛び立ったあとの地面を見ると、不運なツグミが横たわってしま

した。近寄って行って手を伸ばすと、ツグミはまだ生きていて、バサバサと翼をばたつかせて這って、二・三メートル離れた生垣の根元にうずくまりました。私は「傷ついたツグミの気持ちに思いし」深追いせず、そのままに、この場を後にしました。帰る時、庭の地面に落ちていたツグミの腹部羽毛の一塊が、不運な彼への「哀れ」を誘ったことでした。

さて、ここで、私の身体のでっぺんにある、「だいぶ老朽化」したシミュレーターを起動させてみることにします。☆(ハイタカが見た)ハンティング再現シーン ① 農家の庭先地面に獲物を見つけ急降下、飛び立った獲物を空中で前蹴りし致命傷を負わせた(衝突時、パッ!と羽毛が空中に舞い散る) ② 急制動をかけとって返すと、地面に落ちたツグミを追い、足で押さえつけ、弱るのをひたすら待っていた ③ と、急に人間が現れたので、驚いて、獲物を放して逃げた ④ (未練があるので)暫く電線の上で待ったが仕方なく諦めた。

さらに、報道関係も登場です。美人の女性レポーターから、事件の当事者3人にそれぞれインタビューしてもらいました。

『こちら、WBS J放送です。いまのお気持ちを一言でお願いします』(とマイクを差し出す) ☆(ブスッとふて腐れて)『苦勞して捕まえた獲物を、とんだ邪魔に入られて・・・もお〜っ、いやッ!』(ハイタカ♀) ☆(目に涙を浮かべて)『せっかく心優しい人に助けてもらたけど、この怪我ではチョットなあ〜』(ツグミ) ☆(片方の眉だけ上げてニヒルに)『フ、やけにシュールな午後だぜ・・・』(ボク♂)

以上、私の「鷹狩り見学報告」でした。はい、おしまい・・・。「えっ?自転車?」「あ、そうそう、『曰く付き』の話」でしたね。

このマウンテン・バイクは、私の長男が、中学から高校にかけて使っていたものです。その後ずっと軒下で、時には吹き降りの雨にも濡れながら「処分」を待つばかりになっていました。数年前思い立ち、近所の自転車屋さんに修理をお願いしました。

修理見積もり時、現在では新車を買えるのぐらゐの金額でしたが、どうしても手放す気持ちにはなれずに「大枚」をはたいてしまいました。

往時、だんだんと口数が少なくなっていく思春期を迎えた男の子に「父親の立場のほろ苦さ」を感じ、度々「オイディプス・コンプレックス」なる言葉が心をよぎったものでした。

今となつては、懐かしい「子育ての思い出」とともにある、大切な私のバイクなのです。
(おわり)

道東にタンチョウの今昔を訪ねる旅

服部 公子

これは、長年取り組んでいるタンチョウたちの歴史と今の姿を直接みせたい、と日本野鳥の会が10年以上の特別会員やたんちょうファンクラブの人たちを対象に企画したもので、2月7日から2泊3日の旅でした。

参加したのは18名で、道東を巡るバスは1シートに1人とゆったり…。東京からの同行は、保護区を担当する鈴木専務理事と職員1名。根室中標津空港からは、春国岱原生野鳥園ネイチャーセンターと鶴居・伊藤サンクチュアリのレンジャー数名が案内してくれました。

今冬の道東は、全国的な傾向とは逆に例年に比べて暖かく雪も少ないとのことでしたが、そこは道東、ピーンと張りつめるような独特の空気の冷たさは初めての感覚でした。

私がこの旅に誘ったのは、鳥には興味も関心もない友人。懇親会での自己紹介で彼女は、「北海道へ行く？って誘われて二つ返事でOKしたけど、初めての北海道が保護区巡り？観光もない？…どうしよう、行くって返事してしまった！」と披露。一同大笑でした。

その彼女も大感激した氷に閉ざされた風蓮湖。氷下待ち網漁を見守る私達の頭上をトビに混じって飛び交うオジロワシ、私達を遠巻きに見ているオオワシ…。夕日に染まる空を給餌場からねぐらへと群れて飛ぶタンチョウ。暮れようとする湧水の流れる川に佇むタンチョウ。朝、伊藤・鶴居サンクチュアリの給餌場に集まってくるタンチョウに、レンジャーが餌を撒きながら緩やかな丘を登っていく。あれは私達がさっきまでほぐしていたデントコーンの粒だ！いつまでも眺めていたい風景でした。

一旦は絶滅したと言われたタンチョウが、大正年間に十数羽発見され、その後の地道な保護活動で今ではまさしく千羽鶴。「めでたしめでたし」と言い

たいところですが、新たな悩みを関係者は抱えていました。一つは保護と観光の両立。近年、外国からのツアー客を含み急増する観光客のマナーの悪化が保護を難しくしているとのこと。もう一つは強毒性鳥インフルエンザなどの感染症への対応。三大給餌場に1000羽を超えたタンチョウの大部分が集まる現状は、ここまで復活したタンチョウが再び絶滅の危機に陥ることになりかねません。

鶴居・伊藤サンクチュアリのレンジャー達は、タンチョウを分散させることを目指して、自然に餌を採取する場所づくりに乗り出していました。強毒性鳥インフルエンザが現実のものとなった今、このことは急務です。成功してほしいと心から願いました。

道東のタンチョウ、シマフクロウの保護区は28。タンチョウ達の営巣地が、ラムサール条約や法律の網からもれた場所に多くあり、その湿原や原生林を開発から守るために保護区の設置が進められています。ところが、これらの場所が原野商法で切り売りされていたり転売が繰り返されていたりと、真の地権者にたどり着くのさえ困難な状況です。取得あるいは借り上げに至るまでには、担当レンジャーの地道で気の遠くなるような努力の積み重ねがありました。私の「道東の旅」は、真っ白で過酷な大地にたくましく生きる生命を感じ、新たな課題を共有した3日間でした。



野鳥記録（報告順 2010年12月～ 3月に報告のあったもの）

種名	個体数	記録日	場所(通称など)	記録報告者	写真	備考
ツクシガモ	3	2010/12/18	松阪市金剛川左岸河口	西村 四郎	○	
クロガモ	6	2010/12/26	津市香良洲町沖	西村 四郎	×	1
ツクシガモ	3	2011/1/2	南牟婁郡紀宝町鵜殿熊野川河口	中井 節二	○	
オシドリ	8	2010/12/23	熊野市井戸町井戸川上流	平谷 一人	○	
コハクチョウ	3	2011/1/29	明和町根倉里前の水田	須賀 雅司	×	2
ズグロカモメ	1	2011/2/3	松阪市高町	坂部	○	3
コハクチョウ	1	2011/2/2	四日市市水沢町	岡 八智子	○	4
ズグロカモメ	17	2011/3/2	松阪市金剛川河口	平井 正志	×	
ミヤコドリ	104	2011/1/22	津市高洲町 中河原海岸	久住 勝司	○	5
ナベヅル	1	2011/3/29	南牟婁郡御浜町市木	清水 勝海	○	6
ハギマシコ	26	2011/3/19	桑名市大字西別所	斉藤 丈士	○	7
ウミアイサ	1	2010/1/15	南牟婁郡紀宝町高岡相野谷川	清水 勝海	○	8

※報告順

備考1 雄4 雌2

備考2 成鳥1 幼鳥2。日中餌採りに水田へ出かけ笹笛川で休んでいたようです。※非会員の報告。紹介者あり。

備考3 標識が明瞭な写真あり。非会員の報告。紹介者あり。
担当注:2004年から同地で観察されているB9フラッグ個体、8シーズン目の確認。

備考4 2/4 中日新聞掲載。

備考5 満潮時、浜で集合していた。

備考6 1日だけの滞在。3月30日に串本町田原で観察されています。

備考7 19日は12羽以上、20日は15羽以上、25日は26羽以上を観察した。

備考8 この場所での観察は初めてです。

※「備考」は、特に注意のない限り、報告者のコメントから抜粋したものです。

観察記録募集！ 支部のHP http://www.geocities.jp/sirochidori_mie/index.htm から簡単に投稿できます。支部報に掲載できない記録もデータとして保存しています。ぜひご協力ください。

野鳥記録は自然の記録として重要なだけでなく、自然環境保護の際にも必要です。野鳥の飛来、生息を記録にとどめることは日頃野鳥を見ている人の義務であるといってもよいでしょう。日本野鳥の会三重の「野鳥記録」で記載している報告者は第一発見者ではありません。野外での事象で第一発見者を特定することは極めて困難であり、個人の名誉以外にそれほど大きな意味を持っているとは考えられません。報告者名を記載するのは情報の信頼性を高める上からしてぜひとも必要です。「第一発見者でないのに報告するのは気が引ける」とは考えずに、どしどし、報告してください。毎年繰り返される渡り鳥の飛来や、よく見られる鳥についても、野鳥情報にどしどし報告ください。むろん、猛禽類の繁殖、希少鳥類の記録についてはバーダーの集中が無いように発表を遅らせるか、保護部の記録にとどめ、当分は公表しない場合もあります。

事務局だより

支部活動の記録（2011年1月～3月）

- 1/18 太平洋セメント(株) 藤原工場を訪問し、「藤原鉦山および その周辺の新規開発についての要請」文書を手渡した また県庁にて記者会見を行った
- 1/23 会報「しろちどり第66号」発行
- 1/29 中勢海岸（津市周辺）においてミヤコドリの一斉カウントを行った
- 2 「藤原鉦山およびその周辺次期原料山開発事業」問題について本部保護担当と面談
- 3 青山高原ウインドファーム風力発電増設事業に係る環境影響評価書を読覧
- 3/13 第3回理事会
- 3/15 藤原高山およびその周辺の新規開発についてイシザキ（太平洋セメント関連会社）担当者と面談した
- 3/19 地元団体からの要請により、五主海岸で探鳥会を行った
- 3/29 「県営防災ダム事業環境調査その2委託」完成検査に立ち会った
- 3 各委託事業のまとめ作業 決算準備作業 来期の体制・方針検討
- ※3/19・20 しぜん文化祭は中止になりました
- 今後の予定
- 4 期末決算 総会準備
- 4/30 会報「しろちどり第67号」発行
- 5/15 2011年度総会・野鳥講座 第1回理事会

理事会報告

第3回（2011年3月13日）

津市雲出市民センター 出席者6名

【協議事項】

- 総会準備 来期の体制＝新理事候補 運営委員 どう運営に参加してもらうか
野鳥講座＝名城大学 橋本啓史氏（予定）
来期の計画 決算（概算）
- 北勢地方クマタカ調査 継続
- 鈴鹿山脈イヌワシ問題 環境影響評価準備書はまだ出ていない
山頂付近・御池岳山頂付近での調査を検討
治田鉦区・山頂鉦区について継続して会社側と話し合い十分な調査を要求する。その結果によって重要性を判断する。
- 中勢海岸が新たに ラムサール候補地となった
新たにミヤコドリが100羽カウントされたことで、安濃川河口も候補地になる可能性あり
ミヤコドリの一斉カウントを定期化する 海岸清掃を定期化する
中勢海岸のホームページを作成する
シギ・チドリ類の調査地を追加する（香良洲、阪内川河口付近）担当者：今井
- サシバ調査を行いたい。ただし、結果は公表しない予定。
- 木曾岬干拓地問題 県へ要望書をまとめる。
- 風力発電問題 度会町＝進展がない。青山高原＝環境影響評価書の縦覧中である。
- ガンカモ調査の結果を会員に知らせるべきである。

絶滅危惧種イヌワシの保全のため

太平洋セメント株式会社のいなべ市藤原鉦山新鉦区計画見直し要請

日本野鳥の会 三重

財団法人 日本野鳥の会

日本野鳥の会三重（事務局：三重、代表：平井正志）、と財団法人日本野鳥の会（事務局：東京、会長：柳生博、会員・サポーター数約5万1千人）は、1月18日、太平洋セメント株式会社に対して、三重県いなべ市における藤原鉦山およびその周辺の新鉦区の採掘計画について、絶滅の恐れがあり国の天然記念物に指定されているイヌワシの保全のため、計画の見直しを求める要請書を提出しました。また環境省、文化庁、経済産業省、いなべ市、三重県に対し、本件に関する太平洋セメントへの助言と指導を求めました。

藤原鉦山およびその周辺の新鉦区の採掘については、同社により現在、環境影響評価のため各種調査などが進められています。日本野鳥の会三重の調査によれば、この採掘計画の事業地周辺でイヌワシ1つがいの生息が確認されており、その営巣や採食に影響が予測されることが判明しました。

イヌワシは絶滅する可能性が極めて高い鳥類で、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（種の保存法）においては国内希少野生動植物種、文化財保護法においては天然記念物に指定されています。2005年時点において確認されているのはわずかに192つがいであり、繁殖に加わっていない若鳥などを加えても400～500羽であろうと推定されています。さらに繁殖成功率が極めて低くなっており、近年ではわずかに20%程度です（日本イヌワシ研究会HPより）。イヌワシの保護のため、その生息地では多くの開発計画が取りやめになっています（次表参照）。

三重県と滋賀県の県境の鈴鹿山脈においては、かつて6つがいのイヌワシが生息していましたが、現在は3つがいしか生息していません。そのうち、計画中の鉦区の直ぐそばで営巣するつがいは、もっとも繁殖成績の良いつがいであり、他の2つがいは、近年ヒナを巣立ちさせることができていません。また当該つがいは、三重県内で繁殖する唯一のつがいです。その意味で、このつがいの現在の生息環境を維持できなければ、鈴鹿山脈に生息するイヌワシ全体が危機にさらされると判断されます。

藤原鉦山およびその周辺の新鉦区の採掘が、このつがいの生息環境を破壊し、鈴鹿山脈のイヌワシを絶滅へと導くのは、ほぼ間違いないと考えられます。このことから、環境影響評価準備書の結果を待つまでもなく、この開発を中止すべきことを申し入れました。

探鳥会報告（10年12月～11年2月）

● 員弁川探鳥会

2010年12月5日（日）9：00～12：00

いなべ市 員弁川周辺

近藤義孝 参加者19名（会員6名）

カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、チョウゲンボウ、

オオバン、クサシギ、キジバト、カワセミ、アカゲラ、ヒバリ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ツグミ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カラヒワ、ベニマシコ、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 計38種

員弁川の河岸林にシメがたくさんいた。池で

は、よく見ることができるカモ類のほとんどが観察できた。

● ベルファーム探鳥会

2010年12月5日(日) 9:30~11:30

松阪市 ベルファーム

谷口ひろ子 宮田たつ 参加者24名(会員19名)

カイツブリ、カワウ、ダイサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、オカヨシガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、オオタカ、ハイタカ、オオバン、イカルチドリ、カワセミ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、ツグミ、シジュウカラ、メジロ、カワラヒワ、イカル、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 計30種
おだやかな冬日和でした。

青い宝石のカワセミが一度に3羽も出て水面を飛び交う姿や水を飲む姿を、参加者全員楽しみました。カモ類は、一番大きな池が工事中なので少ないように思いました。

● 大仏山探鳥会

2010年12月12日(日) 9:00~11:30

伊勢市・明和町・玉城町 大仏山公園周辺

橋本祐子 参加者24名(会員12名)

カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロ、トビ、オオタカ、ノスリ、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、ウグイス、メジロ、マヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 計19種

子ども達の参加もあり、にぎやかな探鳥会でした。

観察できた鳥の種類は多くはありませんでしたが、2羽のノスリをゆっくり見ることができました。1羽でしたがオオバヤシャブシの枝先にマヒワがいたのも収穫でした。

● 伊賀服部川探鳥会

2010年12月12日(日) 10:00~12:00

伊賀市 服部川周辺

塗矢壽一 田中豊成 参加者10名(会員8名)
カワウ(4)、ダイサギ(3)、アオサギ(4)、コガモ(4)、クマタカ(1)、トビ(2)、ノスリ(1)、キジバト(4)、

ヒヨドリ(3)、モズ(2)、ジョウビタキ(2)、シロハラ(2)、ツグミ(6)、ウグイス(2)、カシラダカ(3)、オオジュリン(2)、カワラヒワ(22)、ハシボソガラス(3) 計18種

オオタカを期待していたが残念ながら出なかった。チュウヒも出るかなと思っていたが出なかった。少し風があつて曇っていたのが悪かった。多少天気に左右されると思います。

今回は時期を変えて会を開いた方がよいかなと思います。

● 横山池探鳥会

2010年12月23日(木) 10:00~12:00

津市 横山池

石原 宏 橋本 勇 参加者20名(会員19名)

カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、オカヨシガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、トビ、チョウゲンボウ、オオバン、キジバト、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、ベニマシコ、ムクドリ、ハシボソガラス 計26種

寒波の到来で寒風吹きすさむ中での探鳥会となった。

それでも横山池にはカモ達の中にミコアイサのつがいやカンムリカイツブリが見られた。池周辺の林やヨシ原では、強風のため小鳥たちの出現は少なく一瞬のベニマシコを観察しただけにとどまった。

参加者は20名と多く、観察会の終了後に日本野鳥の会三重の平井正志代表のオリジナルカレンダーが希望者全員に配布された。

なお、安濃ダム湖畔のレストランで希望者のみの食事会をし、津地区会員は2011年度の探鳥会企画を話し合った。

● 木曾岬干拓地探鳥会

2010年12月26日(日) 9:00~12:00

弥富市 共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 米倉 静 参加者27名(会員11名)

カイツブリ(36)、カワウ(50)、ダイサギ(3)、コサギ(1)、アオサギ(6)、マガモ(191)、カルガモ(118)、コガモ(100)、オカヨシガモ(15)、ハシビ

ロガモ(6)、ホシハジロ(6)、キンクロハジロ(20)、ミサゴ(6)、オオタカ(1)、ノスリ(2)、チュウヒ(2)、コチョウゲンボウ(2)、チョウゲンボウ(1)、ケリ(1)、タゲリ(3)、クサシギ(1)、イソシギ(1)、ユリカモメ(4)、カモメ(3)、ウミネコ(1)、キジバト(10)、カワセミ(2)、ハクセキレイ(4)、タヒバリ(9)、ヒヨドリ(30)、モズ(5)、ジョウビタキ(3)、シロハラ(1)、ツグミ(60)、ウグイス(1)、メジロ(5)、ホオジロ(40)、アオジ(1)、カワラヒワ(13)、スズメ(60)、ムクドリ(24)、ハシボソガラス(50)、ハシブトガラス(15)、ドバト(44) 計 44 種

今年はコチョウゲンボウがたくさん見られると話をしていたら、田んぼの中に雄がいました。帰りには、雌も田んぼの中にいました。

● 上野森林公園探鳥会

2011年1月22日(土) 9:30~11:30
伊賀市上野森林公園 共催団体/上野森林公園前澤昭彦 参加者 13名(会員1名)
カイツブリ、カワウ、マガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、トビ、ヒヨドリ、シロハラ、メジロ、ハシボソガラス 計 10 種

里山の冬鳥を探鳥しましたが、あまり鳥は出ませんでした。探鳥開始ごろから「鳥を食べる」ことに話題が盛り上がりってしまったせいでしょうか。

最後にシロハラをゆっくり観察できたので、まあまあ参加者全員満足でした。

● 木曽岬干拓地探鳥会

2011年1月23日(日) 9:00~12:00
弥富市 共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会 近藤義孝 米倉 静 参加者 22名(会員 11名)
カイツブリ(60)、カワウ(80)、ダイサギ(3)、コサギ(4)、アオサギ(3)、マガモ(200)、カルガモ(80)、コガモ(300)、オカヨシガモ(20)、ヒドリガモ(1)、ハシビロガモ(80)、ホシハジロ(10)、キンクロハジロ(40)、ミサゴ(5)、オオタカ(1)、ノスリ(3)、チュウヒ(2)、ハヤブサ(2)、コチョウゲンボウ(1)、チョウゲンボウ(1)、キジ(11)、ケリ(3)、タゲリ(3)、クサシギ(2)、イソシギ(3)、ユリカモメ(4)、カモメ(1)、ウミネコ(1)、ズグロカモメ(1)、キジバト(30)、カワセミ(1)、ヒバリ(2)、ハクセキレイ(5)、タヒバリ(5)、ヒヨド

リ(20)、モズ(4)、ジョウビタキ(1)、シロハラ(3)、ツグミ(60)、ウグイス(1)、ホオジロ(4)、アオジ(2)、カワラヒワ(50)、スズメ(160)、ムクドリ(100)、ハシボソガラス(100)、ハシブトガラス(10)、ドバト(50) 計 48 種

港の上をズグロカモメが飛んでいました。猛禽類もハヤブサ・オオタカ・ノスリ・チュウヒ・ミサゴ・チョウゲンボウ・コチョウゲンボウなどたくさんでました。

● 銚子川探鳥会

2011年1月23日(日) 9:00~12:00
北牟婁郡紀北町 銚子川周辺
中井節二 北川直人 参加者 14名(会員9名)
カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、カルガモ、ヒドリガモ、トビ、ノスリ、オオワシ、キジ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、キジバト、カワセミ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、ツグミ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 計 33 種

オオワシは、地元の人が3日前から見れないと言っていたが、皆さんの前に出てくれました。そのうえ、真上を飛んでくれて大感激でした。

● 大淀海岸探鳥会

2011年1月30日(日) 9:30~11:15
多気郡明和町 大淀海岸
中西 章 中村洋子 参加者 12名(会員 10名)
カイツブリ、カワウ、アオサギ、マガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、トビ、シロチドリ、ハマシギ、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、カモメ、ワシカモメ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ツグミ、メジロ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ハシボソガラス 計 26 種

天候は晴れでしたが、堤防上での風が強く大変厳しい寒さの中での探鳥会でした。

カモメの数は比較的少なかったものの、一番のお目当てのシロカモメ、ワシカモメを同時に見ることができました。セグロカモメやオオセグロカモメの集団の中にいたので、それぞれの

カモメの特徴を観察できたと思います。

● 木曾三川探鳥会

2011年2月13日(日) 9:00~11:00

桑名市多度町、愛知県愛西市

近藤義孝 参加者3名(会員2名)

カイツブリ、カワウ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、キンクロハジロ、ミサゴ、トビ、チュウヒ、オオバン、コチドリ、ケリ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、ツグミ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 計25種

一昨年は46種、昨年は50種とたくさん観察することができたが、今年は25種だった。

とても寒く、車から外へ出ると5分もするとがたがた震えるほどだった。

● 津借楽公園探鳥会

2011年2月20日(日) 9:00~11:00

津市観音寺町 津借楽公園

杉村滋弘 岡 八智子 参加者18名(会員11名)

キジバト、カワセミ、コゲラ、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、シロハラ、ツグミ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、コガラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、イカル、シメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト、計22種

お天気も晴れで比較的暖かく、良い探鳥会でした。

鳥も22種観察できて、特にカワセミは非会員の方に喜ばれた。参加人数も18名と、一団で行動できた。マヒワの大群も見られて、会員の人達にも満足していただけた。

● 木曾岬干拓地探鳥会

2011年2月27日(日) 9:00~12:00

弥富市 共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 米倉 静 参加者20名(会員6名)

カイツブリ(25)、カワウ(50)、ダイサギ(2)、コサギ(2)、アオサギ(3)、カルガモ(21)、コガモ(60)、オカヨシガモ(20)、ハシビロガモ(6)、ホシハジロ(15)、キンクロハジロ(20)、ミサゴ(7)、ノスリ(8)、チュウヒ(1)、キジ(1)、バン(1)、オオバン(2)、イカルチドリ(1)、ケリ(15)、タゲリ(17)、クサシギ(3)、イソシギ(3)、キジバト(13)、ヒバリ(20)、ハクセキレイ(6)、タヒバリ(10)、ヒヨドリ(20)、モズ(6)、シロハラ(1)、ツグミ(10)、シジュウカラ(1)、メジロ(2)、ホオジロ(10)、アオジ(1)、カワラヒワ(1)、スズメ(100)、ムクドリ(40)、ハシボソガラス(200)、ハシブトガラス(50)、ドバト(30) 計40種

ノスリが観察場所毎に現れ、木曾岬干拓地では同時に5羽観察できました。チュウヒも観察できましたが、その他の猛禽類やカモ類は少なかったです。そろそろ春の渡りが始まってきたのでしょうか。

編集後記

3月11日、1階で仕事をしていたら、ゆらゆらと体が揺れはじめ、気分でも悪くなったのかと思いました。同僚が携帯電話のワンセグでテレビの映像を映してくれました。大きな地震だったとわかりました。17年前の阪神大震災を思い出しました。今回は規模が大きく、復旧も早く進みません。巻頭言の平井代表の言葉のように私も今までの生活スタイルなどを見直したいと思います。近々起きるといわれる東海・東南海・南海の大地震に備えるため、急がないといけないですね。 Y.K.

しろちどり 67号

2011年4月30日発行

題 字:濱田 稔

表紙絵:北川和則

カット:平井正志

編 集:近藤義孝

511-0123 桑名市多度町北猪飼521

発行所:日本野鳥の会三重

平井正志方

514-2325 津市安濃町田端上野910-49

http://www.geocities.jp/sirochidori_mie/

印 刷:東海出版(有)

510-0885 四日市市日永4丁目5-48